

講演会 「東日本大震災と子どもの読書を考える 」

講演 『子どもたちへ〈あしたの本〉プロジェクト』について

2013年3月2日(土)
国際子ども図書館ホール

講師：村山隆雄氏
(社団法人日本国際児童図書評議会会長)

皆さんこんにちは、JBBY会長の村山でございます。間もなく3.11から2年になるとうしているのですが、先進国と呼ばれる地域で災害により亡くなった方、そして行方不明者が2万人に及ぶというのは、初めてのことでした。

私は3.11のとき、川崎市の日本民家園というところを見学しておりました。2時46分のときには外に出ておりましたので、建物とかが壊れて下敷きになるという心配はありませんでした。それでも震度5強というのは初めての経験で、近くのフェンスにつかまっていけないと立ってられない状況でした。少し揺れがおさまってから、川崎市の防災放送が「ただいま、震度5強の地震がありました」ということを繰り返すだけで、実際に何が起こったかということとは分かりませんでした。

その後、我々は近くの岡本太郎記念館を訪れようとしたのですが、入れませんでした。電車も止まってしまっておりましたので、実際に今何が起こっているのかということは、ほとんど正確に知ることができませんでした。その後バスに乗り継いだり、それから歩いたりして、11時過ぎに自宅に帰りました。停電はしていませんでしたので、すぐテレビをつけました。ちょうど気仙沼の火事のところが映っていました。もう本当に驚愕という言葉しかありませんでした。その後、ニュースという形で、何が起きて、そして今また何が起ころうとしているのか、ということをしつづつ知っていったということになります。そして、子どもの読書支援という形で、東北の皆さんと関わることになりました。

今日の私のお話は、まず私と地震のこと、それから私が今所属しておりますJBBYのこと—これは、私どもの本部であるIBBY(国際児童図書評議会)の理念から少しお話ししたいと思います。そして、「子どもたちへ〈あしたの本〉プロジェクト」と、この三つに分けてお話ししたいと思います。

地震と記録を残すということ

皆さん、この写真がどこだかお分かりになりますでしょうか。ちょうど、右側のほうに象さんがいます。ここにちょっと崖崩れが見えます。これは、1934年にインド北部のビハールとネパールを震源とした大地震の際に起こった崖崩れの様子です。このとき、カトマンズ盆地全体に甚大な被害がもたらされました。次の写真は、パタンという市のダルバール・スクエア(王宮広場)の当時の様子です。次の写真は2010年に撮ったものなのですが、オランダのチームが長年復興に活躍しまして、現在は元の形を取り戻しています。

私は震災が起こる3か月前まで、JICA(国際協力機構)のシニアボランティアとして、ネパール国立図書館に半年間赴任いたしておりました。先ほど、坂田館長が海外青年協力

隊と言ってくれましたけれども、私は当時既に 62 歳で、青年とは言えませんので、シニアのほうで行っておりました。そこでは、「治すよりも予防」をモットーに、マネジメントをよくして、できるだけ多くの本をいつも使えるような状態で、できるだけ長く残そうという考え方の普及が私の任務でした。

講義の中で、図書館資料を破壊する「書物の敵」ということをいつもお話するのですが、一つ目は、職員による—これは利用者も含めてですけれども—資料の取り扱いをきちんとすること。二つ目は、書庫の環境を整えること。それから三つ目は、酸性紙の問題など、図書館資料を構成する物質やその性質を知ること。それから四つ目は、資料の陳腐化とっていますけれども、今、メディアも多様化しておりますので、例えば再生装置そのものをどうするのか、といったことに対する備えです。そして五つ目が、起こりうる災害を想定して、できるだけ対策をとる、そして減災を図るということ。このような考え方を伝えようとしていたわけです。

なぜ私が、減災の考え方を伝えようとしたかといいますと、ネパールはヒマラヤの麓にあり、ヒマラヤ造山運動の影響を受けていますので、大体 80 年から 100 年の周期で大きな地震が起きております。直近の地震が、今御紹介した 1934 年の大地震です。ただ、資料を調べようとすると、ネパールには災害の記録というものが残っていないのです。先ほどお見せした白黒のほうの写真は、この地震直後にインドの地質調査所が入り、あるいは、入れない場所は聞き取り調査をして、まとめたものから掲載いたしました。

もう一つ気になったのは、私がいろいろ説明しても、どこかちょっと他人事のような感じがしていました。「そんな大きな地震あったの？」といった感じです。それは、記録がないということもあるのですが、ネパールは途上国ですので、平均寿命、特に女性の平均寿命というのがとても短いのです。2000 年代に入るまでは、両方とも 50 代でした。ですから、80 年とか 100 年の周期を、いわゆる言い伝え、口伝という形では伝えられなかったのです。そういう、やむを得ない部分があるとは思いますが。

今日はこの後に、国立国会図書館の大場さんから、東日本大震災アーカイブの御紹介がありますけれども、やはり記録を残すということはとても大事なことでありと思っています。そしてもう一つは、一人一人が命を守るということのためには、やはり生身の体としての記憶というのでしょうか、それが伝えられるということがとても大事ではないかと思っています。

JBBY (日本国際児童図書評議会) について

前置きが少し長くなってしまいましたが、私が入っておりますこの JBBY というのは、英語で Japanese Board on Books for Young People といい、日本語では日本国際児童図書評議会といいます。私の九州の友達などからは、「お前のところは一体なんばしよっとか？」とよく言われるんですけども、英語でも日本語でも長いので、懲りずに略称 JBBY と言っております。ちなみに、この JBBY のロゴの部分は、1984 年に国際アンデルセン賞の画家賞を受賞されました安野光雅先生のデザインによるものです。JBBY の説明をするとき、私はいつも IBBY (国際児童図書評議会) との関連で説明いたしております。JBBY は、IBBY の「子どもの本を通じた国際理解の促進」といった大きな理念に共鳴して、1974 年に設立されました。IBBY の本部はスイスのバーゼルにありまして、現在は 75 カ国が加盟してい

ます。去年までは 77 でしたが、少し減ったようです。JBBY は、その IBBY の日本支部にあたるのですが、本部・支部という関係よりも、ゆるやかなネットワークといったほうがいいかな、と思っています。

皆さんは、この写真がどなたかお分かりになりますでしょうか。本日お集まりの皆さんは多分お分かりになるのではないかと思います。よく講演などでこの写真を出しますと、リンドグレーンという答えが帰ってくるんですね。この方も相当気が強そうですね。御存じのようにイエラ・レップマンです。

レップマンについては、森本真実さんが 2002 年にこぐま社から『子どもの本は世界のかけ橋』（イエラ・レップマン 著 森本真実 訳、こぐま社、2002.9、請求記号 GK461-H1）という素晴らしい翻訳の本を出されました。この自伝によりますと、レップマンはドイツに生まれたユダヤ人です。かなり早熟だった人じゃないかと思います。お父さんが工場主で、その工場で働く外国人労働者のために、子ども図書室を作ったりしています。ナチスが台頭してきますと、彼女は友人の勧めに従ってイギリスへ亡命します。そして第 2 次大戦後、女性と子どものための教育と文化のアドバイザーという形で再びドイツに赴くこととなります。追われた故国にもう一度戻るといことは、彼女にとってはとても重い決断だったのではないかと思います。彼女は、GI の運転するジープに乗って、戦後のドイツ、本当にカオス、混沌とした状況のドイツを見て回りました。そこで彼女は、子ども達には、シェルター（避難所）もいるし、着るものも食べ物もいるし、薬もいるのだけれども、精神の糧としての本がいるという確信に至ります。カオスといわれる状況の中で、子どもの本ということに思い至り、確信するという、これは本当に何というインスピレーションだと思う事がよくあります。彼女は、森本さんの本の言葉を借りますと、「この混乱した世界を正常に戻すために、まず子どもから始めさせてください」と言って、自分の上司である米軍の上官を説得していくわけですね。そして 1946 年には、ドイツを巡回する国際児童図書展を成功させています。ざっくりとした数字だと思えるのですが、100 万人集まったというふうにも言われています。そして 1949 年には、ミュンヘンの国際児童図書館、そして 1953 年には IBBY を設立したわけです。

ここに IBBY の主な活動をまとめていますが、児童書の普及ということでは、国際アンデルセン賞あるいは IBBY のオナーリスト、そして日本の朝日新聞社がスポンサーであります IBBY 朝日国際児童図書普及賞の授与などを行っています。それから、すべての子どもたちに読書の権利の保障する「危機の中の子どもたち (Child in Crisis)」プロジェクト、そして「障害児のための指導センター」を運営しています。

子どもたちへくあしたの本>プロジェクト

この 3.11 を受けて真っ先に考えたのが、危機の中の子ども達に対して私たちに何ができるかということでした。実は IBBY の本部自身は、皆さんよく御存じのように、末盛千枝子さんが呼びかけられ、被災地の読書支援の先駆けとなりました「3.11 岩手絵本プロジェクト」の支援を行ったのですが、私たちとしては、先進国における危機の中で、支援する側から支援される側に立場が変わった状況下で、自分たちが何をやらなければいけないのか、何ができるのか、そういったことを思い浮かべながら考え初めました。

JBBY には、作家やイラストレーター、あるいは大学の先生、図書館員から編集者や文庫

活動をやっている人など、様々なメンバーがいます。日本ペンクラブ、あるいは日本出版クラブ、出版文化産業振興財団に属するメンバーもおりましたので、子どもの本に関わっているこれら4つの団体で何かできないかということで、2011年の5月にプロジェクトを立ち上げることになったわけです。その他にも、先ほど松岡先生がお話しになりましたように、やはりJBBYに個別にどんどん電話がかかってくる、それから責められるような感じで「いつになったら動くんだ」と、そういう御意見もありました。出版界とも協力関係にありまして、特に大震災出版対策本部は、多くの書店、特に個人書店などをサポートするために活動を続けているところですが、ここの協力関係にあります。

実際に私たちがプロジェクトを発足するにあたっての心構えというのは3つありまして、本を送りつけることは絶対にしないということ、それと人の温もりということでしょうか、声を一緒に届けたいということ、そして困難さは伴うであろうけれども、中長期的な展望という視点を持って活動していこう、ということでした。

このプロジェクトの活動を、ざっくりと図にまとめてみました。虹のライブラリー—仮設の図書館ですね—、お楽しみ会、図書館バスの運行、絵本原画のチャリティーオークション、野馬追文庫、だいじょうぶだよセットの送付、という6つの活動から成り立っています。

まず、絵本原画のチャリティーオークションです。これは活動資金を獲得するために実施いたしました。作家や画家に、原画や色紙の寄贈を呼び掛けまして、内外から133人259点に上る作品を集めることができました。被災地を含む11か所でそれらの展示会を行い、インターネットによるオークションも実施いたしました。現在、2回目のチャリティーオークションを実施するため、準備中です。今月の19日と20日、大崎のゲートシティで子どもの本フェスティバルを行うんですけれども、オークションに出品する作品の一部を展示する予定で準備を進めております。今日の配布資料の中にこの子どもの本フェスティバルのチラシもありますので、ぜひお出かけいただきたいと思います。

次に、だいじょうぶだよセットの説明をしたいのですが、今日はホールの後方にだいじょうぶだよセットの現物を持っています。これは日常生活の中で、ハンディキャップを持った子どもたち、支援を必要とする子どもたちを対象にしたもので、このセットの配布については、最初からかなり精力的に行っています。セットは、地元の小児科医、あるいは臨床心理士のアドバイスや、被災者の皆さんの要望を入れる形で作っておりますから、地域ごとに違ってきますし、避難所ごとにも違ってきます。絵本だけではなくて、ドラえもんを混ぜることもありますし、点字絵本や布の絵本、あるいは遊具を加えることもあります。布の絵本や遊具については、34～35年にわたって神奈川を中心に活動しておられます「ぐるーぷ・もこもこ」さんとか、北海道の「ふきのとう文庫」さんの協力も得ながらやっております。

それから野馬追文庫ですけれども、これは南相馬の仮設住宅に、毎月11日に2冊ずつ絵本を選んで送っているプロジェクトです。南相馬というのは、激震と津波、そして放射能という三重苦に見舞われている地域です。

これは、図書館バスの運行です。この写真は、もう 2 年前になりますけれども、福島の川俣町に避難してきて、もともといる園児たちと一緒にいる幼稚園を訪れたときのものです。

図書館バスは SAPESE-Japan というところから借りてやっております。当初は、絵本を積んだりして、こういった保育園や幼稚園、あるいは学校を回ってプレゼントをすることで回っていました。1 冊だけ選んでいいよ、なかなか選べない子がいて、バスの中で一人だけ残っている子どももいます。それから、これらの本は寄贈していただいて、我々も一応セクションはするのですが、中にはディズニーとかアニメ関係も多くあります。残念ながら JBBY が推薦したいものは、最初選んでくれなかったように思います。昨年 4 月からは、三陸の沿岸、石巻あるいは気仙沼の定期巡行を始めております。2 週に 1 回、土日です。図書館バスは停まる場所をなかなか確保できないので、セブンアンドアイホールディングスさん—セブンイレブンさん、あるいはイトーヨーカドーさんと言ったほうが分かりやすいかもしれません—が大きなスペースをお持ちですので、そこに駐車させていただいて回っております。返却などがなかなか大変なのですが、これはお店のサービスカウンターに返却すればよいということでやっています。今日は 2 年にわたって、図書館バスの運行に尽力してくれています齋藤紀子さんも、この講演を聴講してくれております。

それから、仮設図書館の運営です。この表は、国立国会図書館関西館の図書館協力課が昨年 3 月に出した、「東日本大震災と図書館」という形で被害状況をまとめたものから、岩手県の部分だけを抜き取ったものです。この他に、福島あるいは宮城があります。我々がなぜ陸前高田を選んだかというと、松岡先生がおっしゃったのと同じなんですけれども、津波で全壊した図書館ということと、市の職員全員が亡くなった、あるいは現在でも行方不明ということがあります。

もう一つは、土地の提供者があったということが非常に大きかったと思います。それから人間関係がある程度あったということで、気仙川の小高いところに仮設の図書館を作りました。ここは、水曜日と土日祝日に開館しております。この写真はちょうど一昨年の 11 月 12 日にオープンしたときのものです。ここでも、作家の先生方あるいはイラストレーターの先生方に協力していただいております。虹のライブラリーの看板は、加古里子先生にデザインしていただいたものです。この図書館のもう一つの特徴は、本は汚さないというルールを守っていただくということで、スペースにも非常にゆとりがありますので、お茶を飲んでいただいたり、あるいは、そこでお弁当を食べることもできます。今は、手芸教室や、イベントの会場にも使われております。

陸前高田は三陸の中では平野部が一番大きいところですので、被災当初は、夜になると本当に真っ暗になりました。これは、一昨年の 12 月にクリスマスキャラバンとして上野樹里さんなどと三陸を回った時に車から見えた景色です。周辺の高台の所が少し明るくて、あとは本当に真っ暗なんです。「にじのライブラリー」の現地の責任者は、荒木そうこさんという元教員の方です。御自身も津波でアパートが流されてしまったのですが、昨日「にじのライブラリー」ができたときに、あるドライバーが彼女に「真っ暗だったところに、

ちょっと灯りが見えるようになった」と言ったそうで、そのことがとても嬉しかったと私に教えてくれました。やはり灯りというもの、人の心にどういふふうに影響を及ぼすか、ということ再認識したような気がしております。

もう一つ、お楽しみ会なのですけれども、これもやはり作家や画家の皆さんの、「自分たちも何かできないか」といった声からスタートしております。お手元に、私たちのプロジェクトの発足当初からの2年分の様々な活動記録があります。これもぜひ御覧いただきたいと思いますが、その一部を少し写真でお見せいたします。これも、一昨年の9月に私も一緒に行った、川俣町の幼稚園でのお楽しみ会です。この方がどなたかお分かりになりますか。末吉明子先生ですね。ちょうど魔女の恰好をして登場してくれたところなのですけれども、末吉先生はいろいろなところでこのペープサートをやってくださっています。

それからこれは、つい3週間程前、2月9日と10日に盛岡と東松島新図書館で開催した子どもの本祭りのときの、お絵かきワークショップを行っている垂石眞子先生と小林豊先生です。この二人の先生に励まされながら、子どもたちが描いております。すごく人気があって、おはなし会もやっているのですけれども、子どもたちが、自分も絵を描きたいと集まってきて、椅子をどんどん追加する、というようなこともありました。

盛岡での子どもの本祭りには、角野栄子先生も講演のために駆けつけてくださいました。それからこれは、翌日に東松島市図書館で開催した同じ子どもの本祭りです。威勢のいい格好をされているのが、翻訳家のさくまゆみこ先生です。さくま先生は助六太鼓という江戸の太鼓を習っておりまして、ちょうどこの日は、この師匠筋と仲間と一緒にここで太鼓を披露した後、太鼓というテーマでブックトークをやってくださいました。私は最初、図書館で太鼓というのはいかがなものかと少し心配していたのですけれども、好評でした。

東松島市図書館もかなり大きな被害だったのですが、それでも1か月後くらいには再開できる見通しでした。それが、4月7日に発生した余震一震度6強だったでしょうかで天井が崩落してしまったのです。それで再び休館を余儀なくされました。そういう中でも、小学校などに本を届けたり、あるいは開館できないのであれば出前図書館をやろうということで、やはり図書館バスで移動して本を届けてこられました。「図書館サービスの行き届かないところに自分たちは行くんだ」ということで、ずっと活動を続けておられます。この写真の方は加藤孔敬副館長なのですけれども、スタッフの人たちも、とにかく市民のためということで、肩肘張るのではなく、非常にしなやかにと言うのでしょうか、笑顔で対応されていまして、本当に居心地のよい空間になっています。

被災地でこのようなイベントをするときに、やはり地元の受け皿がないとできないわけです。それぞれの地域で文庫活動を行っている皆さんの御協力を得なければ、とてもできることではありません。この2月9日と10日に開催しました子どもの本祭りでは、うすゆきそう文庫さんに御協力いただきました。うすゆきそう文庫さんは、「3.11岩手絵本プロジェクト」の活動でも、活躍されているというふう聞いております。

このように私たちの活動は、非常に多くの方々に支えられてやっております。私たちの願い、あるいは地元の人たちの願いはもっと強く、様々な活動が復興に向けて収斂していくということだと思います。しかし実際に回っていますと、やはり場所によって環境も条

件も違いますので、なかなか復興が進んでないなという感じがすることもあります。そして、被災者からは、「皆さんが忘れないでいてくれたら、私たちは頑張れる」ということを何度か聞きました。それでも復興の道筋が長ければ長いほど、非常に大変になっていくと思います。そしてまた、サポートする側もくたびれるかもしれません。しかし私は、そうであればあるほど、先ほどのレップマンのことを思い出すのです。

レップマンは、戦後のドイツという非常に混沌とした中で、子どものために児童図書展の開催、それから国際児童図書館の設立、そして IBBY の設立と、次々に子どもにとってかけがえのないことをなしたわけです。彼女のしたこと、あるいは、するにあたっての態度というのでしょうか、そこから 3 つ学ばなければならないのではないかと私は思っています。一つは、困難な状況の中で、高い志を立てたこと。それから、めげずに志を実現していったこと。そして、彼女は相当向こう意気の強い人だったのですが、議論の末に友人や仲間を増やしていった、それも国境を越えて増やしていったということがあるのではないかと思うのです。非常に大変なのですけれども、やはり私たち大人が粘り強くやっていくしかないと思っています。

IBBY は、本の持っている力を信じて、子どもたちの希望につながるよう、これからも「子どもたちへ〈あしたの本〉プロジェクト」を、四つの団体が一緒になって続けていきたいと思っております。

御清聴どうもありがとうございました。